生誕130年記念

知られざる佐藤春夫の軌跡

――秘蔵資料をよむ――

実践女子大学・新宮市立佐藤春夫記念館 包括連携協定締結記念

■河野龍也〔編著〕
Tatsuya KŌNO

武蔵野書院

目次

はじめに……iv

第一章　闘志みなぎる怠け者……1
記スベキ⌐ナシ（コト）
——佐藤春夫日記（一九〇四年）……2
志士を以て自任
——「同時代私議」草稿（一九一二年）……9
春夫の結婚問題
——佐藤夏樹・秋雄日記（一九一二～一四年）……16

第二章　一作で世を動かす……21
行きづまりから、文壇の寵児に
——「田園の憂鬱」の誕生（一九一八年）……22
ライバルに励まされて
——佐藤春夫宛　芥川龍之介書簡（一九一七年）……26
私の好きな男
——島田訥郎挿絵稿……36

第三章　自分を見つめる旅……41
スランプ到来
——「私の日常生活」草稿断片（一九一九年末）……42
熱帯の土地を行く
——台湾・福建旅行関連資料……48
得難いアドバイザー
——森丑之助『台湾蕃族図譜（織物ノ部）』図案集……57

第四章　恋する詩人の真剣勝負……61
絶交しても、僕の心の中にある君を思ふ
——佐藤春夫宛　谷崎潤一郎書簡（一九二一年）……62
さんま苦いか塩つぱいか
——詩稿ほか……71

第五章　苦悩と摸索……81
そのネクタイは三十何本目だい？
——「剪られた花」草稿（一九二一～二三年）……82
ブックデザイナー・春夫
——『剪られた花』装丁案……86
失恋だけが本当の恋だ
——「紫陽花」「薔薇と真珠」稿（一九二一～二三年）……93

第六章　惜別、よきライバルへ……101
目下海辺の憂ウツ中
——佐藤春夫宛　芥川龍之介書簡（一九二六年）……102
芥川龍之介がよき霊に捧ぐ
——『車塵集』草稿綴（一九二八年）……112

第七章　結実のとき……121
世の中は常なきものを
——「細君譲渡事件」の蔭で（一九三〇年）……122
小説は噂話の終ったところから始まる
——『維納の殺人容疑者』装丁資料（一九三三年）……131

第八章　戦雲せまる……141
活動の多様化から「非常時」の表現へ
——翻訳・随筆・戦争詩の時代……142
おれもさう思ふ
——谷中安規装画『FOU』（一九三六年）……149
先生、私を厳正叱咤、いまはいけませぬ
——佐藤春夫宛　太宰治書簡（一九三五～三六年）……152

第九章　疎開先からの再起……161
秋風や時に古城にのぼる人
——佐久スケッチノート（一九四五～四六年）……162
ありがたさなみだながれて
——『佐久の草笛』自筆稿（一九四六年）……171

第十章　春の日の主……181
「門弟三千人」伝説
——佐藤春夫宛　檀一雄書簡（一九四六年）……182
「小説」への挑戦
——少々は事実を曲げても真実を書きたい……188
「私は幸いに…」
——書かれなかった手帖（一九六四年）……196

新資料　翻刻篇……201
【新資料1】佐藤春夫談話　速記稿（全集未収録）……202
【新資料2】佐藤春夫書簡　佐藤豊太郎宛（第一章参照）……206
【新資料3】芥川龍之介書簡　佐藤春夫宛（第二章参照）……209
【新資料4】谷崎潤一郎書簡　佐藤春夫宛（第四章参照）……211
【新資料5】芥川龍之介書簡　佐藤春夫宛（第六章参照）……212
【新資料6】芥川龍之介葉書　佐藤春夫宛（第六章参照）……213
【新資料7】芥川龍之介書簡　佐藤春夫宛（第六章参照）……213
【新資料8】室生犀星書簡　佐藤春夫宛（第六章参照）……214
【新資料9】太宰治書簡　佐藤春夫宛（第八章参照）……214
【新資料10】檀一雄書簡　佐藤春夫宛（第十章参照）……217

佐藤春夫略年譜　新宮市立佐藤春夫記念館作成……220

はじめに

詩人で小説家の佐藤春夫（一八九二～一九六四）は、たぐいまれな多才さと近代文壇随一の人脈の広さで、近年再評価の気運がとみに高まっている作家です。

二〇一〇年、御子息の佐藤方哉氏（元慶應義塾大学教授）が亡くなられてから、講談社版・臨川書店版佐藤春夫全集の出版に尽力し、春夫文学の普及のためにあらゆる努力を惜しまなかった牛山百合子さんとともに、御遺族のお許しをいただき、実践女子大学の協力を得ながら、東京文京区の佐藤家に遺された資料の整理を進めてきました。その過程で、「芥川賞事件」にまつわる太宰治の新書簡や、芥川龍之介の未公開書簡、春夫のデビュー前の日記や原稿など、大きな発見が相次ぎました。

佐藤春夫生誕一三〇年にあたる本年八月二九日、実践女子大学と新宮市立佐藤春夫記念館との間で包括連携協定が締結されたことは、今後の近代文学研究に一つの進展をもたらすはずです。二つの機関は、二〇一四年の春夫没後五〇年における展示協力以来、展示物の貸借や情報交換を通じて着実に信頼関係を深めてきました。二〇二〇年に台湾文学館（台南）で開催された特別展「百年の旅びと：佐藤春夫一九二〇台湾旅行文学展」では、双方が共催団体として名を連ね、展示の実務に協力しました。今回の提携で、資料の調査・公開・活用がさらに促進されるのを研究者としても待望せずにはいられません。大正から昭和にかけての近代文壇史を語るうえで、春夫は確実に中心人物の一人と言えます。そのような春夫の旧蔵資料からは、今後さまざまな未知の事実が明らかになるはずです。

協定締結を記念して、実践女子大学渋谷キャンパスでは、「知られざる佐藤春夫の軌跡――不滅の光芒――」展（二〇二二年九月二六日～一〇月一五日）が、また新宮市立佐藤春夫記念館では「わんぱく時代の地から――知られざる佐藤春夫の軌跡――」展（同一〇月二五日～翌二月一二日）が開催されます。展示品の多くは、一〇〇年あまりにわたって佐藤家に秘蔵されてきた新出資料の数々です。春夫の創作過程をつぶさに伝える草稿や、春夫にゆかりある人々からの手紙が見どころになります。

今回、展示資料を永く楽しめるようにと、『車塵集』版元の武蔵野書院に御賛同いただき、新出資料の紹介を中心とする新しい春夫文学案内を編むことになりました。資料解説がそのまま春夫文学の理解につながるように工夫したつもりです。貴重資料をカラーで実際に見ていただきながら、あたかも作家の机上を眺めるように、臨場感をもって春夫の生涯とその時代を体感していただければ幸いです。

この貴重な秘蔵資料の数々について、調査と展示とを快くお許しくださり、長きにわたってあたたかく見守ってくださいました高橋百百子様はじめ御家族の皆様、また、資料の公開について深い御理解をたまわりました春夫の御縁につながる多くの皆様方、そして資料撮影や写真掲載に多大な御協力をたまわりました実践女子大学ならびに新宮市立佐藤春夫記念館の皆様にあつく御礼申し上げます。

二〇二二年九月

河野龍也
（東京大学准教授・実践女子大学客員研究員）

第一章　闘志みなぎる怠け者

1910（明治 43）年冬　19 歳の春夫
〔新宮市立佐藤春夫記念館提供〕

記スベキ⌐ナシ――佐藤春夫日記（一九〇四年）

一八九二（明治四三）年四月九日朝、佐藤春夫は和歌山県東牟婁郡新宮町（現新宮市）の医師の家に生まれた。兄弟には姉と二人の弟がいる。佐藤家は代々医術を継ぎ、かつては家塾「懸泉堂」で地方教育に貢献した学芸の家である。父・豊太郎は春夫に家業の跡取りを期待する一方、北海道で農場経営にもあたった。結局春夫が文学の道に進んだかわりに、次男・夏樹が農場を継承、三男・秋雄が医学を修めた。

二〇一五（平成二七）年、佐藤家から三兄弟の日記が見つかった。そのうち春夫の日記は一九〇四（明治三七）年元日から七月二九日まで、和罫紙二七枚に墨書きされたもの。新宮高等小学校二年を卒業し、新宮中学校に入学する数え一三歳（満一一～一二歳）当時の生活を綴る。自然豊かな野山を駆け回り、テニスやベースボールに興じたり、友達と鉱物を交換したりする明治の少年の日常生活が読み取れる。日露戦争開戦の号外に心躍らす記述もある。新宮を舞台に、自分の幼少期を小説化した春夫晩年の名作「わんぱく時代」（『朝日新聞』夕刊一九五七年一〇月二〇日～五八年三月一七日）の資料に使われた可能性がある日記だ。

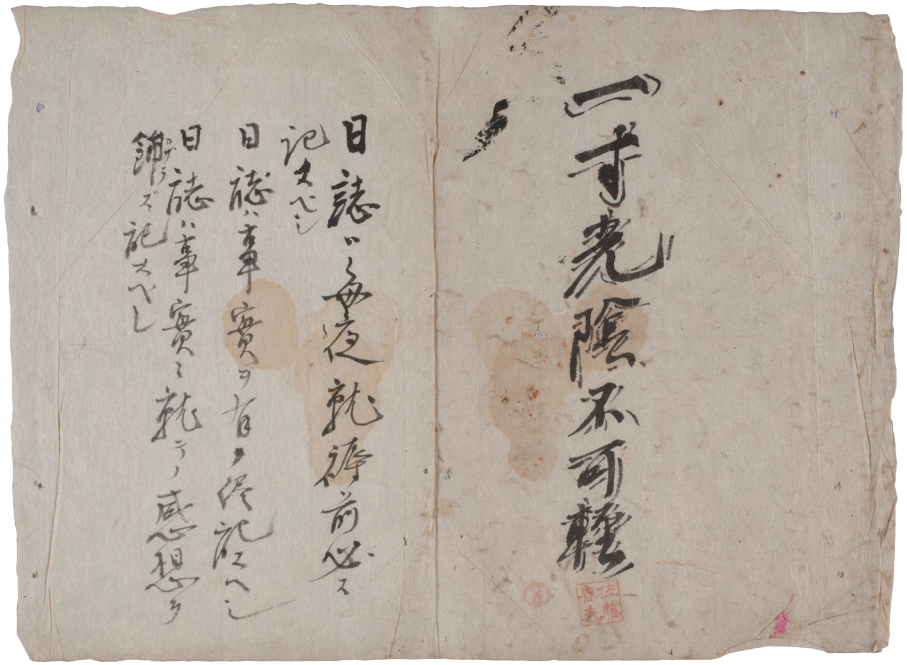
表紙には父の字で「一寸光陰不可軽。ほかに「日誌ハ毎夜就褥（じょく）前必ス記スベシ／日誌ハ事実ヲ有ノ儘（まま）記スヘシ／日誌ハ事実ニ就テノ感想ヲ飾ラズ記スベシ」の三ヶ条が見え、日記をつけることが息子の自己鍛錬になるよう期待した。

はじめは春夫も「殊勝な少年」を演じようと心掛けたようだ。しかし次第にそれが面倒になり、やがて「記スベキ⌐ナシ」を連発して怠け始める。父はこれを知って呆れかえり、「世ヲ益シ人ヲ益スルモノハ小児ハ小児大人ハ大人丈ケ其日々々ノ仕事ト考ト云フモノカアル　ソレナキモノハ米食虫悪ク言ヘハ造糞器デクソヲコシラヘル道具ニ外ナラン」と書き込んだ。怒り心頭かと思いきや、同日の春夫の記述には「日誌ノ⌐デ父ニ笑ワレタ」（七月四日）とある。「梟睡」の俳号を持つ父の説教には、どこかユーモアも見えて余裕がある。

春夫は後年、中学入学時の面接で将来の希望を「文学者」と答えたと回想している。また同じ頃、父の患者を見舞いに来ていた年上の少女（大前俊子）に恋をしたと述べている。だが、文学的関心の芽生えや初恋の兆しを日記から読み取ることはできない。事の真相は不明というほかないが、たとえ事実だったところで、医者の父の目が光る日記では、おいそれと書くわけにもいかなかったろう。それよりも、教育熱心な父の前で何とか体裁を取り繕おうとする春夫少年のほほえましい駆け引きが、この日記の大きな魅力と言える。

もっとも、春夫自身は日記に心底懲りたらしい。晩年、「日記は少年のころ父からやかましく言われたのが逆効果になって、終につける習慣ができなかった」（『詩文半世紀』一九六三年八月読売新聞社）と述べている。佐藤家に残されていたこの古い日記は、まさにその「逆効果」を生んだ少年時代の苦い記憶の形見だったわけである。

1904（明治 37）年頃の家族写真
春夫、父豊太郎、姉保子、弟秋雄、母政代、弟夏樹。〔新宮市立佐藤春夫記念館提供〕



春夫日記 表紙　毎日、事実とその感想とを飾らず書けと求める父の三ヶ条。